

石川県私立高等学校経常費補助金（特色分）の配分方法に係る 見直しについての意見交換会（議事録）

（敬称略）

司 会：定刻になりましたので、ただいまから「石川県私立高等学校経常費補助金特色分の配分方法に係る見直しについての意見交換会」を開催いたします。あらかじめご案内の通り、本日の意見交換会は公正円滑な議事運営の観点から、取材は意見交換会に入る前までとさせていただきますのでよろしくお願いいたします。本日進行をさせていただきます県総務課の宮田でございます、よろしくお願いいたします。それでは開催にあたりまして、澁谷総務部長からご挨拶申し上げます。

澁 谷：総務部長の澁谷でございます、本日は大変お忙しい中お集まりいただきまして、大変ありがとうございます。この「石川県私立高等学校経常費補助金特色分の配分方法に係る見直しについての意見交換会」ということで、関係者にご参加いただきました。私立学校は、建学の精神と独自の伝統や校風に基づいて、特色ある教育活動を展開されておられるということで、県内では高校生の約 3 割が私立学校に在籍しており、本県における学校教育の発展に重要な役割を果たしていただいています。こうした中、私立学校に対しまして、自主性を尊重するということを基本とし、建学の精神に基づく学校作りへの支援を行っておりますが、具体的には教育環境の維持向上、それから保護者の経済的負担、この辺のところは特に最近は大変なところがございますが、それから学校経営の安定を図るため、各種助成を行っております。その中に位置づけられております、私立高等学校経常費補助金、これが今回のテーマでございますが、平成 21 年度に、特色教育の取組に応じて配分する部分について見直しを行いました。それからもう 13 年が経過しているという状況になっております。その間、相当、学校教育を取り巻く社会環境、教育環境、そういったものが大きな変化をしておるところです。実際、お手元にもございますが、石川県の教育振興基本計画、こういったものも、その間に変更がなされておる状況になっております。こうしたところを踏まえて、同時に成長戦略の策定ということも行っているところですので、学校教育の向上は、成長戦略に資するものです。こういった時期を捉えまして、見直しをしようということをしていただきまして、本日お集まりいただいたところでございます。

司 会：本日は、まず私どもから見直しの背景、それから新たな配分項目案についてご説明をさせていただきます。その後、私立学校の皆様から私学の現状をお話しいただいた上で、有識者の方々皆様からご意見を頂戴したいと考えております。本日は皆様から忌憚のないご意見を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。それでは、今回の出席者をご紹介いたします。お手元のタブレットに用意しております名簿もあわせてご覧ください。

（出席者紹介）

司 会：それでは、お手元のタブレット端末に配付いたしました会議次第に従いまして進行してまいりたいと思います。まず、県総務課より、石川県私立高等学校経常費補助金特色分の配分方法に係る見直しの背景等についてご説明いたします。お手元のファイルをご覧くださいと思います。

〔 県から「私立高等学校経常費補助金（特色分）の配分方法に係る見直しの背景等について」説明 〕

司 会：それでは続きまして、新たな配分項目（案）についてご説明いたします。

（県から「新たな配分項目（案）」について説明）

司 会：以上が新たな配分項目（案）についての説明になります。では続きまして、私立高校の現状について、私立中学高等学校協会様から説明いただきます。まず向会長お願いいたします。

向：今の説明にもありましたけども、県内の高校生の約3割の生徒が私学に在籍しております。私学としては各学校、お手元にもありますけども、令和3年策定の第3期石川の教育振興基本計画に基づいて、教育活動を展開しております。また、今後も現在策定中の石川県成長戦略に基づいて、今後の教育活動を展開して、引き続き県の教育活動の一翼を担っていきたいと考えております。それと8ページの新たな配分項目について私の思いといいますか、1番から10番までありますけども、これは全て重要だと考えております。特に9番の少人数指導、習熟度別指導等の充実、また10番のいじめ、不登校等への取り組みの充実。この二つにつきましては現在も既に取り組んでおりますが、全ての学校で、いずれもきめ細やかな指導が今後も必要だと考えています。特に10番のいじめ不登校、これはなかなか難しい問題でありまして、解決の糸口もなかなか見えないわけです。どんな形でやっていけばいいのかも含めまして。ちょっと戻りますけども4ページに現在の配分項目があるわけですが、私学にとっての永遠のテーマといいますか、建学の精神をどう具現化するかというのが私学の場合にあります。私学の特色ある教育活動の例としましては、1番目の自主講座の開設。講座制の授業であったり、外部の講師の先生方を招いたり、あるいは外部で実施したり。これは遊学館の例ですけど、150講座を設けまして、それを生徒が自由に選択できるものを設けております。これは一つの例としまして、独自の教育だと思います。それから2番目のスポーツ文化活動の推進。これにつきましては、明日から県の高校総体も始まりますし、県の高校野球も始まるわけですが、私学においては、県大会の実績、それから全国大会の実績、どのスポーツにおいても大きな成果を上げていると自負しております。目に見えた成果というのは、このスポーツ活動が挙げられるかだと思います。最後になりますけども、教員の働き

方改革、これについては、私学も同様の問題を抱えております。特に今ほど触れましたけども、スポーツ活動においては、土日の問題、それからスポーツ活動以外でも、今後様々な分野で外部の支援員や指導者、そういった人たちの力を借りることがこれから増えてくるのではないかと考えております。私学としましても今後も県の公教育の一翼を担っていきたいと考えておりますので、今後ともよろしくお願ひしたい。

司 会：続きまして、杉浦様お願ひいたします。資料をご用意いただきましたので、今お配りいたします。

杉 浦：会長の方から、私学9校全体の概要についてありましたけど、私の方は現場の校長として、9校それぞれ違いますので、金沢高校としてどういうことが行われているのかということをお話させていただければと思います。手元に資料がありますが、8ページの番号に沿って私なりに分けさせていただきました。新しい項目を見ていただければいいかと思ひます。その前に、少しお話をさせていだきたいと思ひんですが、これは、金沢高校のみならず、私は中学校の方に営業活動に行っておりまますので、中学校の現状、そして県立私立、両方ほぼ全ての学校での問題だというふうに認識をしておりますが、今学校でどういうことが課題になっているのか。一つは意欲の二極化。学力の二極化に最終的に少し繋がっていきますが、意欲の二極化。この話をすると、校長先生方が皆さん、本当に大きくなずかれる状況です。何もしない、家庭学習もしない、活動もしない方も部活の加入率は減ってきております。ますます今後も減ることが予想される。そして二つ目が不登校。三つ目がいじめ。この不登校、いじめについては、会長からもありましたけれども、大変大きな問題が年々複雑になってきている。そして、それとともに保護者の対応があるということです。そして四つ目は、これは生徒、教員ともに言えることですが、レジリエンスの低さだと思います。43年教員をしておりますけども、当時を振り返ると状況はもちろん違い、求められるものも違うんですが、単純に言いますと、レジリエンスの低さというのは先生方の精神的なトラブルにも繋がっておりますし、生徒の二極化等にも繋がるのではないかなと思ひます。そして五つ目が、教員の希望者の減少。これも県立私立も同じかなということです。校長として一番大きな仕事は、生徒と教員の確保かもしれない。教えられる者、教える者双方に課題が山積をしている現状がある。こういう中で、国や県から経済的な支援、その他いろいろな支援をいただいで、教育活動に活かさせていただいていると。大変ありがたいと思ひている次第でございます。先ほど言葉が足りませんでしたけど、教える者の課題の中には働き方改善が入っているということもござひます。これまで行ってきた教育活動の中に大きな影響を与えている。色々な意味で影響されているというのも問題として残っているかと思ひます。私立学校9校それぞれが他校との違いを明確にして、創意工夫した教育活動を展開しております。そしてそのことが私学全体としての評価をいただいでいるのかなと思ひます。生意気な言い方ですけども、教育の発展に寄与しているというふうに自負しているところです。時代とともに経常費補助金の特色

分における配分項目が見直されることは当然だろうと思います。もう十分理解しているところですが、会長からもありましたけれども、自主講座の開設、スポーツ文化活動の推進、教育条件の改善、この3点については十分配慮をいただきたいなと思っているところですが、それでは、新たな配分項目について、私立9校の現状を説明することはできませんが、金沢高等学校の現状を少し説明させていただければ。お手元にある資料に項目を挙げてありますので、一つ一つ説明することはいたしませんけれども、若干付け加えるところをご説明したいと思います。先ほど言いましたように番号は新たな配分項目の番号と一致するものになっております。まず一番重要なことは、高校での地域との連携というのは、地域の方々の感想も聞いたことがあるのですが、なかなか難しいところが実はあるようです。地域の方からすると、高校生というのはちょっとハードルが高いとおっしゃる。例えば、雪が降ったら除雪を手伝うとか、高校生がこちらの方から行ってできる、意外と簡単なものですが、双方が一緒になって何かを取り組むというのは、できるんですけども、準備は大変というか、地域の方がおっしゃるには、子供ではない高校生というのは、先ほど言いましたようにハードルが高いということは、よく聞く言葉でございます。本校としてはそこに書いてあるように、一番は伝統文化を正規の授業として長年やっておりますので、最終的には希望者は師範免許を取るところまでいきます。そういう意味では非常に伝統文化については理解が深まっているというふうには思っております。あとそちらの方に書いてありますが、地域祭礼に参加。これ、人手不足で担ぎ手がいなくなりまして、本校のとある先生との接触があり、現在、手伝うようになってきている。相手側も、非常にどうしても必要だということがありまして、双方の気持ちが繋がって実施されたということかもしれません。それから2番目ですが、希望者は医学・薬学セミナーを北陸大学や自治医科大学様との協力を得てやっております。科学部も非常に長く活躍をしています。近年では数学オリンピックなどにも参加しており、今年初めて上位10%になりました。上位10%に入りますと賞状がもらえますので、校長室で表彰をやったということもあります。それから3番目は、英語教員を雇いまして、全クラスにおいてネイティブ教員の授業が1時間はできるというように現在なっております。それから、英語検定もこれまで取り組んできたんですが、まだまだ不十分だということで、今年度から数値目標を上げて取り組んでいこうとなっております。これまでも、英検50%を目指してきたんですが、現在26%ちょっとです。まだまだ届かないところです。ただ、準一級を取る子が出てきたり、上位層の方で変化はあると思っておりますが、ご存知のように、私立学校はコース別、金沢高校でいうと、S、特進、進学とありますので、入試の点数でわかれているわけではありませんが、学力層が違うわけです。そういう中で、50%というのは大変高い目標ということになるのかもしれませんが、頑張っていきたいと思っております。それから4番、SDGsを踏まえた活動ですが、いしかわ家庭版ISOや、いしかわ学校版ISOの認定はしています。学校のゴミ減量化は3年取り組んでいますが、大幅なゴミ減量に繋がりました。職員もゴミを出せない状況になっておりますので、大変厳しいですが、生徒のいろいろな

SDGsの勉強になっているのかなと思います。6番はキャリア教育。これは探究にも繋がると思うんですが、こういうことを実施させていただいて、成年年齢の引き下げに関する学習も教科横断でやっている。家庭科では金融教育を長年ずっと継続してもらっています。それからユニクロ・GUとの「届けよう服のチカラプロジェクト」につきましても、もう数年継続的に行われております。生徒自身が考える、生徒自身が幼稚園や地域を回って集めて、そして、それを困ってる国に送り届けるということをやっております。これはSDGsにも繋がることだなと思いますが、こちらの方に分類させていただきました。それからSTEAM教育ですが、STEAM教育に精通して、テクノロジー、プログラミングの分野にまでカバーできる教員の確保というのは大変厳しいと思っております。本校では、探究に力を入れるため、探究に特化した先生の採用を行いました。これをしていくときには、そういう特化した先生、専門職を採用するというようなことを考えていかなければいけないかと思っております。先ほど私は、時代とともに変化は仕方ないにしても、教育条件の改善、ここは教員のところに関わってくると思いますが、そういうところに繋がると思っております。本校では先ほども言いましたけれども、教科横断的な取り組みは、こちらの方に挙げてありますように、やっているところがございます。ここには書かなかったんですが、2年の1年間、私どもが提携を結んでいる3大学の先生方の協力を得まして、去年は20項目、今年は15項目の項目がありまして、そこにはSTEAMに関係するテーマもいろいろありますので、例えば、がん、農薬とかいろんなものがありまして、それを生徒たちが1年間、先生方の支援を受けて取り組んでいて、発表、予選、そして決勝戦というような発表をやって、校長が想定している以上の発表が行われたというのが昨年実績としてございます。昨年面白かったのは、校歌も生徒は最近あまり興味持たないので、本校は朝に必ず校歌を歌わせるんですけども、校歌の意味をもう一度考えてみよう。それは金沢高校の歴史も考えなきゃいけないということ。それと音楽の先生とコラボしました。そしてその勉強の後、体育館でみんなで歌う。それから特別支援教育につきましても、今年4月3日にLGBTQ+のコンサルの松永権さんに来ていただいて、職員の研修。それから、コンプライアンス顧問弁護士の方に来ていただいて研修とか、パワハラ、セクハラを中心にやっていただきました。それから生徒への特別な配慮。本校は教育支援、教育相談といった方がわかりやすいかもしれませんが、県下で一番早かったのではないかなと私は思っているんですが、そういう部屋を設けております。そういうノウハウを積み重ねてきています。そしてこれで3年目になりますが、多目的トイレを複数用意しております。そこには更衣室も入っております。それから女子の更衣室は当たり前ですが、男子の更衣室も作りました。やはり男子も教室で着替えるというのは違うであろうと用意させていただいています。今後もそのことについては色々検討し、もちろん制服の女子のストラックスも実施しております。それから9番をご覧ください。これは先ほど、「自主講座の開設も大事ですよ、考えていただければ」というふうに申し上げましたけれども、やはり土曜講座で日頃できないところを補っていくところで、先生方は大変なんですけど、やはりここは私立としては大事なところかな

と思っております。今年度は、現役東大生に来てもらって、上位層の強化、もちろん全体の底上げは本校のテーマなんですけど、上位層もしっかり伸ばしていかないとダメなので、対応していきたい。それから放課後。底上げにも繋がるんですけど、教員希望の大学生に来ていただいて、放課後にある部屋を用意して、そこに生徒たちが質問に行くと個別対応する。大体20人程度、そして毎日来てもらえる。全員に人気です。そういうのも取り組んでおります。少人数も、本校は昨年まで全体の38クラス全て35人を下回っておりました。今年の一年生、私の予想を超えた人数が入ってきたために、平均が36人になったところがちょっと残念かなと思っておりますが、少人数教育については取り組んでいるつもりです。最後に10番なんですけど、そちらの方に書き上げてあります。先ほど申し上げました通り、いじめ等の問題は非常に複雑化しておりますので、このことで、先生方がもう耐えられない、働き方改革にも繋がる問題で、先ほど会長が糸口が見えないというのは正直なところ、学校でもそういうお気持ちなんだろうと思っております。私も今、特別な何かってことはありませんけれども、本校としては、保健室や相談室の連携をして、学校全体として丁寧な対応、今後もそれを続けていくしかないかなと思っております。最後になりますけれども、繰り返しになりますが、生徒たちの意欲の二極化というのは、大変大きな重い問題でございまして、大きく言えば国を挙げて取り組んでいかねばいけないんだと考えております。一教員として、こういう状況に至ったというのは非常に責任を感じてございまして、何とか取り組んでいきたいと思っております。長くなりました。申し訳ございません。

司 会：ただいまの私立中学高等学校協会様からのご説明について、有識者の皆様からご質問等はないでしょうか。

松 川：石川県 PTA 連合会の松川です。意欲の二極化は、私も学習塾を経営してるのでごく分かる。背景として、保護者も二極化しているというところもあるんですけど、中学校までは親と教員の方が関わる機会が結構あるんですけど、高校に行ってからあまり学校の先生と話すことがなくなった、というのは実感としてあって。実際、保護者との連携は、多分これに加わると大変な業務量だなと思うんですけど、どんな感じでしょうか。

杉 浦：私、教頭2年、副校長2年、校長は今年で7年目なんですけど、副校長のときから中学校を回りだしたんです。その頃から、そういうのはポツポツと出てきておまして、例えば上位層の子でも、例えば理科も好きなのはやるけど、嫌いなところはやらないと、「えっ」と思うところがその頃から徐々に出てきていました。そして二極化は高校だけの問題ではなくて、中学校でも大きな問題にも繋がってしまっていて、一応高校受験のときは塾へ行ってやるんですけど、例えば金沢高校に受かった段階でもうやらないと。担任が面接をすると、半分以上は何もやらない。進学コースでもそういうふうなことに繋がっている。保護者の関わり、面談は、年に2回は確実にあ

ります。でも、それ以外のポイントでは、トラブルを含めていろんな問題で親の関わりは、前より大きく、回数多いです。私学としては、塾の分野にまで及ぶぐらいの補習授業とか、個別の対応、先ほど言いました大学生が来てもらって面倒みてもらう、様々なことをやっておりますので、保護者の方ともこれ以上何かというのは。ただ、この10年、本校ではもう看過できない状況になって、急だったわけではなくて、私の感覚で言うと10年で大きく変わってしまった。小さい頃から何かやった達成感を得られない、勉強したのに点数が伸びない。誰かから厳しい指導を受けたとか。色々なものが重なって、意欲の低下が起こってきたんだろうなど。部活動をやってもレギュラーになれない。そういうことの繰り返しの中で、昔のように「なにくそ、もう一つ上に目指して頑張るやろう」というのが、なくなってきてる。目立つのも嫌だとか、自分1人が頑張ってるが嫌だとか、人にどう思われるかが気になるとか、全てがパックですね、全てがこの1パックになって絡んでいる。ですから根が深い。解決の糸口が見つからない。お答えになっているのか、わかりませんが、けれども。

松 川：物価が上がってきて、でも賃金が上がらなくて、両親共働きで、ダブルワークしてのお母さんとかもいる中で、子供との関わりもすごく薄くなってきているんだろうなというのは感じていて。「その指導は塾じゃなくてお家だよ」ってことも先生から言うて下さいみたいな、今までなかったようなお願いをされるのが、ここ数年すごく多い。それも家庭の中の経済状況のことも考えると、こっちもあまり言えない。私学はすごくいい塾対象の説明会とか、すごくいい取り組みを沢山されてるなというのは感じていて、あえて促す子とかもいるんです。私学専願で。そういうときの一助になるんだったら、すごく大切な会だなと今日改めて思いました。

杉 浦：経済的にはすごく大変になっていると思います。本校で言うと、年収ベースで590万未満が3割、910万円までの加算部分が3割、となりますので、この部分がちょっと厳しくなっていると考えます。

石 野：色々と両先生から私学の経営の難しさ、教育の現状問題点を色々お話いただきました。大変ご苦勞が多いなとお聞きしているんですけども。今日のこの会議では、私学の特色分の補助、全体の補助金の7%をいかに配分していくかということがテーマですので、私としては、その一つとして、是非グローバル人材の育成を考えた場合に、外国語、まずは英語ですね、これに取り組んでいる私学に何かしらの補助を厚くお願いしたいなと思っております。自分が学生の時は、英検何級というのが全てでしたけれど、最近、会社の面接では英検よりも資格として、また自分の能力を表す一つの指標としてTOEICが良いと言われます。TOEICよりも、海外に出るときはTOEFLだという話もあるようですけれども、今現状、グローバル人材で英語にスポットを当てた場合、私学の先生方の学校では、どこに指標として用いることが多いのかなど。先ほど準2級とかいう話もありましたけれども、それを一つお聞きし

たい。もう一つは、短期留学。よく夏休みですと、2週間、ひと月であろうかと思えますけれども、1年間の留学を海外のカナダやアメリカでもオーストラリアでも出している生徒さんが、石川県内では、私学では何名くらいいるのかなど。逆に海外から日本に入ってくる、日本の文化を学びたいとか、それを石川県の私学で、石川県の学校で学びたいと。そういったときには公立ではどうしても受け皿になりにくいと思うんですね。私学の方がより、そういう際の受け皿になれるのかなと思ってお聞きするんですけど。海外から来る高校生、石川県では何名ぐらい私学で籍を置いているのか。分かるものなら教えていただきたい。

向 : ここ3年間はコロナで多分ほぼゼロじゃないかという気はするんですけど、実際のところそういう統計はとっておりませんので、はっきりしたことはわかりません。ただコロナ前は、多少は留学生を受け入れてる学校はあったと思います。遊学館でも何名か受け入れてましたから。伝統的に言えば北陸学院さんは結構受け入れているのかなと思います。またコロナが5類になりましたから、今後増えていくのではないかと思う。遊学館もフランスのナンシーの学校と姉妹校提携してまして、これもコロナで今のところ特に交流がなかったんですけど、もちろんネットを通じてのものはありますけども、今年の秋に遊学館の希望の生徒が行くという形に今のところ計画はされてます。1年交代で行き来すると。

石 野 : 姉妹校との交流はいいと思う。大学ではありますけれども、あるスポーツ競技の特待生を特別に迎える学生、生徒。そういうのも、それぞれの競技においてあるかもしれないけれども、そういう迎え方ではなく、それは普通の生徒として迎えることとなると思うんですけど。いわゆる交換留学生とかそういったところは何かしら一つの指標として考えていけばいいかなと感じていました。

杉 浦 : うちの昨年からは再開しました。常時2名、ロータリークラブから1名、AFS日本協会から1名の留学生。それから、これから海外の研修は再開されていくかと思いますが、先ほどありました、経済的な問題等で、以前よりは希望者が減っている感じはします。それから英検だけではなく、いろんな資格検定がありますので、それは柔軟に外国人講師も含め対応しています。確かに英検以外に受験する生徒が増えているのは事実です。学校としては英検の方がわかりやすいというか、圧倒的にそちらの受験の方が多いものですから、そちらを中心にやっているということです。

八重澤 : 先ほどの、意欲の二極化ということですが、これは二、三十年ぐらい前から教育社会学者の方が指摘してたんですね。例えば、オックスフォードにいらっしやった刈谷先生が書かれたのは、先ほど先生がおっしゃったみたいに、まずは、親の問題があるということ。例えば、子供が今日は学校に行かなくて、父親が競馬でお金を儲けたものですから、家族で焼肉を食べに行った。そしたら5時になりちょうどサラリーマンたちが駅の向こうから帰ってくると。それを見て父親がどう言ったかとい

うと、「かわいそうだよ、あんなふうな追い込まれた生活になって、お前、あんなふうになっちゃ駄目だよ」と子供に言っていると。既に指摘されてますね。ですから、この意欲の二極化というのは、教育が何らかの形で子供にセルフエスティームを高めようとしても、かなり限界があるのではないだろうか。教育や子供など、弱いところに社会の矛盾が出てくる。つまり階級移動できにくい社会なんです。日本の社会もある意味で、固定化されてきている、希望が持てない人たちが何名かいらっしゃる。でも、それでいいわけではない。でも教育（の現場）は目の前の子供を何とかしなければいけない。だから教育とそれを取り巻く私たちの社会全体の二方向で考えていくべきだと思います。よく「親ガチャ」という言葉が流行ってますけども、もうあれはそれを代弁してるような非常にわかりやすい言い方ですが、でも、逆に言えば、親の方から見たって「子ガチャ」があるんじゃないかと。子どもに足を引っ張られる。でも、そういう社会はよくないから、教育のできるところから、少しずつ変えて、格差社会をなくするようなことをやると。ちょっと、ヒントになるかどうかわからないですけども、アメリカは1965年から、ヘッドスタート計画という、今でもやってるセサミストリートを教材とした教育に着手した。そこにはいろんな有色人種が登場してきて、そしてとにかく子供の入学前の学習のスタートラインを同じにする（頭を揃えてスタートする）という考えから実施している。高校生では既に学習はスタートしてますから、なかなか難しいかもしれませんが。例えば、あのような取り組みができる可能性を少し考えていきたい。しかし意欲の低下というのは、大学生も一緒です。意欲形成や達成動機、アチーブメントを形成するっていうことは学校の中でも何らかの形でできるというふうに思ってます。2点目は不登校やいじめ、これも2000年になる前から不登校やいじめのことは、もうずっと（教育心理等の）学会のテーマですね。それで、最近不登校もいじめも複雑化して、そしてなおかつ中学高校の時点で何らかの手を打たないと、そのまま大人になってしまう。日本の弁護士の方にいじめ教育、予防教育って（資料に）出てますけれども、例えば弁護士だけじゃなく関係する人たちで、何とか次世代の子供たちに対するアプローチをしなければいけない。今は「スクールカウンセラーを配置しました」でみんな完結ですけども、実際にその人たちがちゃんと機能してるのか、その人たちは、その教育現場でどんな努力をしているか。私学のカウンセリングのページを見ましたが様々だと思う。ただカウンセラーを配置して、うちは（カウンセラーが）いるから大丈夫だっていうレベルもあれば、コロナ禍である非常勤のスクールカウンセラーが、ホームページを立ち上げて、こういうときに来なさいねって言っているような例もあったりして。もう少し実効あるように考えてみたらいいのではないかな。このあたり（生徒指導）が一番大変で、本当にすごく教育現場の方は努力されているし、県もいろいろ方向付けようとやっているけれども、教育だけの領域で対応するのは限界があるかもしれません。でも、やる必要はある、ということを感じながら、どういうふうな配分を、ということが大事になってくるかなと思います。

司 会：今のお話で協会側から何かありますでしょうか。他にご質問等はございませんでし

ようか。ないようですので、ここから有識者の方による意見交換に進みたいと思います。私立中学高等学校協会の皆様には、ここで退席していただきます。本日はお忙しい中ありがとうございました。

(私立中学高等学校協会ご退席)

司 会：今ほどの県からの説明や、私立学校さんからの現状を踏まえ、お示した配分項目案を中心に、有識者の方からご意見をいただきたいと思います。今ほど八重澤先生からご意見をいただきましたけれど、その他ございますでしょうか。

八重澤：お願いしたいことがあります。AI 教育というよりは、今どこの大学も必死になっているのは ChatGPT です。これは突然降って湧いたように出てきて、県内の大学でも、教員も勉強して、学生が ChatGPT でどんな文書を作成しているかということをやめ勉強してくださいと言われて。先生方は大変だと思う。どこまでが真実で、どこまでがフェイクということがわからないけれども、学生は Wikipedia だって使いたがってるんです。ですから ChatGPT も何らかの形で織り込むことはできないかですよね。実践的なデジタル教育の推進の基本的な知識、AI 等の基本的な知識と言ってもいいかもしれませんね。

岡 田：そこで ChatGPT の仕組みとか、そういったものを知ることです。

八重澤：私が気になってるのは、「実践的な英語コミュニケーション」。英語のスキルとコミュニケーション能力って、ほとんどが一緒でいいですが、日本の学生は、全ての日本人を含めてコミュニケーションがととても苦手ですね。それは日本語の特徴と関係があって、日本文化というのは、高文脈です。高文脈というのは「言わなくてもわかる／付度もできる」、それから、ずっと相手の顔色を窺って最後に「・・・ですね」、というようなことを言います。本当は「ですね」じゃなくて、「違うんじゃないかな」と心の中で思っている、「…と思うこともあるかな…」というような（相手に配慮した）言い方をしますね。英語自体は非常にイエスノーをはっきりしていて、一番最初に結論から出てくる。ですから、英語のスキルということと、プラス、コミュニケーション能力の形成。コミュニケーションは、ここだけじゃなくても、全てのところに関係する。しかも日本経団連の調査では 2004 年ぐらいからずっと、採用する学生に必要な能力としてコミュニケーション能力が 1 位になっている。つまり、きちっと自分の意見を述べる。英語でやっていたら必然的にそうなるでしょうけども、日本語でやってもコミュニケーション能力、つまりアサーションできるというようなところは、どこかで対応しているかと思いますが。実践的な英語スキル、プラス、コミュニケーション能力の育成に関する取組（が必要）。

岡 田：コミュニケーション能力の育成という取組。英語に限らずですね。

澁谷：先ほど石野社長から言っていたことと共通してると思う。私は文章を作ったりするとき、英語で考えると割と理屈の通った正しい文章が作れるのですが、日本語で作ると曖昧な文章にどうしても出来上がってしまうので、英語でまず考えるという癖を自分でもついたりしています。英語学習というのは必ずしも英語によらないコミュニケーション能力を育成するものでもあると思う。また、高校教育に関して、コミュニケーション能力は企業の方からも求められているでしょうし大事。そこは、よく検討します。

八重澤：8番（特別支援教育の取組の充実）とか10番（いじめ・不登校等への取組の充実）は、人権教育の問題と絡むと思う。LGBTQも、いじめで不登校というようなこともあると思う。LGBTQを特別支援に入れるのはちょっと「???」がつくが、そのような人権教育をやっているところ（私立高校）を評価したらどうでしょうか。

岡田：14ページお願いできますでしょうか。既存項目の見直しということで、3の（5）の中に「人権教育の推進」がございまして、人権教育に関しては、こちらの方で評価したいというふうに考えています。

八重澤：わかりました。

司会：石野様、ご意見ございますでしょうか。

石野：私学と公立の違いというところになるわけですがけれども、私学では最近、生徒を迎えるために、特進コースとか、学力を徹底的に指導しますよというのを打ち出していたり、中学から準備するとか、また、寮を既に持っているところもありますし、向先生のところも今、街の真ん中に寮を建てておられます。そういう取組は今後ますます進んでいくだろうと思っております。そういう中で、私学ならではの取り組みをしている学校に、この特色分を分けてあげるべきだなというふうに思います。どういう特色かと言いますと、一つは留学生またはグローバル教育ということです。それが一つと、土曜日のセミナーとかも、非常に私学ならではのと思います。その中のセミナーの一つに当たるかもしれませんが、金融リテラシー。今、成年が引き下げられましたし、デジタルとかの前に、セミナーなど特別な時間をとって、もっと指導していかなければいけないんだろうと思います。もう一つ、もう何年も経ちますが、選挙権が引き下げになりましたよね。これは決して私学だけの話じゃないですけど、選挙はこういうものなんだよといったところを早め早めに。これは地域でそういう意識を持たなければいけないですけども、まずは学校。18歳で選挙権を持つ年齢に達するわけなので、そこでもっとしっかり。先生だけに任せていい問題じゃないですけども、私学でもそういう取組をしてもらいたいと思います。

松 川：石野さんと一緒に、今、公立も国立の学校もいろんな取組をされていて、結構被っている活動も多いですけど、「この学校ならでは」というところを評価して欲しい。私は元教員なので、地域との関わりとかも、取組をしようとなったら、時間外労働をやらざるを得ない現場状況がある。「こういった配分項目があるから、これをしないと、あれも対応しないと」と思った活動が、今の先生方の業務にプラスオンで乗ってくるのではなくて、「今の労働時間の中で何かできること」といった、負担にならないように導いて行ってあげられたらと思う。土曜講座にどのぐらいの生徒が来ているのか。これは生徒も大変になると思う。普段の学校の時間以外での活動の割合が高くなり過ぎるのは、あまり良くないというふうに思いました。

澁 谷：先ほど、お二方から働き方改革の話がありました。今の配分項目は、教育の中身自体に着目しているところが多いですけど、働き方は緊急の課題ですし、それがきちんとしてないと結局は教育の中身にも影響することと思うので、大事な項目だと思います。

松 川：土曜講座とか書かれると、私が教員だったら「土曜日やらなきゃ」みたいな印象を持ってしまう。地域の人とか、企業を呼んでやるにしても、「誰が学校開けるの？行かなきゃいけないね」とか思ってしまうから、そこの表現で、何か他にあるのか。

澁 谷：検討させていただきます。働き方改革というところについても、何がこの中でできるかということも検討することが必要と感じております。

八重澤：正確にはわからないのですが、土日に出勤する教員は、他に時間を振替しているのではないですか。実は、私学で土曜講座を担当したことがあるのですがけれども、学生たちの需要はあるのですね。先生もおそらくは（担当を）交替じゃないですか。だからどこかで休みを取られていると。しかし、土日の講座を全てなくするかどうかというのは、また別の問題だと思います。おっしゃる意図は、加重負担にならない、つまり「持ち出しで、ボランティアというようなことがないように」ということだろうと思うのですね。

石 野：働き方改革は、どこにおいても外せないところですがけれども、ここに入れると収まりつかないことになると思うんですね。公立高校の場合は、給特法がありますけど、私学の場合は、それに大方準ずる形でやっておられるところが多いんですかね。私学同士で横の情報はある程度はあるとは思いますが、それぞれに組合と、学校側でいろいろ問題があるように聞いてます。今日はお二方とも学園側の方なので、実際に授業を持つとか、セミナーを世話する先生方の立場のことは、どこまでこういった場に出てくるかはわからないと思うんですが。その辺は逆にお聞きしたいんですけど、総務課の方では、そういうのは問題として相談を受けたりするんで

すかね。働き方改革において、特に時間外とか、先生の職場はブラックだとかって
いうことがありますよね。

澁 谷：教育委員会と県立高校との関係と違って、総務課が私立学校の設置者では決してな
いので、ブラックの問題とかは基本的には学校における問題なんで、県がどうする
とか、そういった立場にはないです。例えば国立大学でも、傾斜配分みたいな補助
金がありますけれども、あれは国立大同士を相当競争させて、かなりの傾斜をつけ
て、「重点的な取組をしているところにはいっぱい」、「そうじゃないところは少なく」
という形です。ここは高校なので、一応その特色はあるってということなんです
が、傾斜配分をすること自体を目的にしているというよりも、建学の精神に基づいて、
「それぞれの学校の事情に応じて、特色ある取組を是非やってください」というメ
ッセージなので。働き方改革について言えば、「この中で何をやってくれ」という
ことまでは求めませんけれども、多分入れるとしたら、学校それぞれの悩み、改善
しなきゃいけない点、「そういったところに目配せをちゃんとしていますか」。そう
いった形でなら入れられないことはないと思う。ここに「具体的にこうすべき」と
までは入れられないと思う。

石 野：よく甲子園の春の選抜のときに 21 世紀枠で、試合の結果成績ではなしに、「地域に
おいて町と関わって取り組んでますよ」とか「こういうボランティア活動してます
よ」とか、そういったのが選考理由として出ますよね。そういう地域との連携、ま
た、何か地域社会と一緒にやっていると。さっき言いました、18 歳からはもう成年
なんですし、選挙権も投票に行かなきゃいけないという、地域の一員なんだという
ことを、公立高校でもそうなんですけど、私学で打ち出すところがあってもいいん
じゃないかなというふうには思います。地域社会とかって具体的にどうなんだって
言われると、それは色々あろうかと思うんですけども、そういうのは、公立高校
よりも私立高校の方が打ち出しやすいんじゃないかなと思います。出前講座をやっ
ているところもありますが、普通高校ではどうなんですかね。

塩 田：今でも高校は「政治的教養を育む教育」と言って、「1 年次にこんなことする、2 年
次にこんなことする、3 年次にこんなことする、教科でやる部分と模擬授業とか模
擬裁判に行く」という計画を各学校に作らせ、県教委に提出させて、やらせていま
す。そういう仕組みが定着している。

澁 谷：私立学校であっては、まずどういうことができるか、検討いたします

塩 田：この配分計画を作るときに最初の立案の部分でお聞きしましたけど、要は、「今やっ
ている私学の教育を、もう一度、県の振興基本計画の項目に照らし合わせて見つめ
直してください」という、ある意味投げかけなんですよね。しっかり整理してくだ
さいよと。それで足りてないところがあるのであれば、新しい取組を入れたり、改

善をしてくださいよという。そういう県からのメッセージをここで出そうとしているってことなんですよ。そうすると、先ほど石野さんがおっしゃったように、英語コミュニケーション能力、今県でやろうとしている。ここ2、3年とコロナで駄目でしたけど、「トビタテ！ジャパン」は国を挙げてやっています。石川県も、初年度は少なかったんですけども、ようやく年間で15人、20人近く行くようになっていって。今またコロナが終わって、トビタテについても高校生にしっかり働きかけて、どんどん高校から短期留学というか、トビタテは多分2週間から4ヶ月の幅で自由に選択してできる仕組みになってると思うんで、例えば夏休みの間にショートステイで行ってくるとか、そういう取組もどんどん促進させる。そうすると、そういう子たちが大学へ行くと、大学での留学のハードルが下がるんですよ。そういうことを県を挙げてやっというところなので、是非私学でもやってほしいという思いもある。あとは、私学なので分からない部分があるんですけども、特別な配慮を要する生徒への対応というか、発達障害のお子さんが公立でも一定程度いるってことは、私学にもおいでですよ。公立であれば、例えば、特別な配慮を必要とする生徒さんには個別の支援計画をしっかり作って、それに応じて組織的に対応するように言っています。個別の支援計画は各学校で作られていて大体95%ぐらいの作成率ですけど、私学の情報がないのでわかりませんが、「個別支援計画を作って、そういう生徒さんに対して学校全体でしっかり組織的に対応してくださいよ」という一つのメッセージとして、こういう項目を入れる意味はあるのかなと思っています。いじめ不登校。これはもう私学公立に関係なく大きな問題になっているので、ここについても、先ほど八重澤さんがおっしゃったように、単にスクールカウンセラーを置いてるだけじゃなくて、それがどう機能してるかということも審査する上でしっかりと見ていかなくちゃいけない部分かなと思っています。あと一つ、STEAM教育は、これはあくまで探究するための一つの手段なんです。手段のところは項目になっていて。実はSDGsはテーマ性があるんですよ。この部分では、SDGsのテーマをSTEAMの視点でやってる学校も結構あるわけなので、この部分は、項目が完全にセパレートしてはなくて、かなり重なっている項目も中にあると思っています。デジタルのデータサイエンスなんかも、ある意味、STEAM教育の中でデータサイエンスってのは出てくるわけですから、若干関わってるところがあるので、事務局は基準(案)を作るのは大変だったと思うんですけども、そのあたりは、少し重なってる部分があるってことを認識した上で、基準作りをしていった方がいいのかなと思っています。

司 会：その他ご意見ございますか。

塩 田：先ほど土曜の話で、県立は土曜補習という、授業の延長みたいな授業はしません。授業はしてませんが、授業の補習とかそういったものです。例えば私学さんが言うように、土曜日を使って華道を勉強するとか、そういうような話とは違うんです。今、県立は、土曜日授業をやめてる学校もあるんです。生徒に時間を返すというか、学校

がコントロールして勉強させるんじゃないくて、生徒が自ら必要と思って勉強するような環境を作っていく。部活も土日の1日はどちらかは休みになってますから。どんどん子供に時間を返して、その中で子供が自分で考えて、自分がそこで何をすべきかということを考えてどんどんやっていく方がいいんじゃないか。そうすると、土曜も先生も少し余裕が出るし、そういう方向も実は必要だなということは考えています。でも私学の方はどんどん土曜日を使って、いろんな講座をやってという思いもありますし。そこは考え方の違いはあるんですけど。付け足しておきます。

石野：本当、そう思うんですね。土曜日かつめすぎです。私学さんはやっぱりアピールしたいんで、うちはこういうカリキュラムを組んでるんですよ。土曜日もこういう講師を呼んでいろいろ実社会のことも勉強しますと。アピールしたい気持ちはわかるんですけど、部活もそうですが、少し時間を戻すとおっしゃいましたが、それは大事だと思います。

八重澤：多分、普通の授業の中でなかなか難しいのかもしれませんが、私が担当した講座は、一つは「ジェンダーイコリティ」ですね。それからもう一つは、県の男女共同参画課で作っている、将来にわたる進路計画ですけれども、妊娠、出産、就職とかある中で、どういうふうな選択をそれぞれ（の時期に）したらいいか。普通の授業ではなかなかできない可能性があります。私は、最初「本当に学生たちが来るのかしら？」ってまず思ったのですね。大体、土曜日、部活動とかでしょう。そしたら、男子も女子も来て。性別にこだわるのはよくないのですが男子が非常に刺激的な発言をしたり回答を寄せたり。それも男女共同参画課にフィードバックしましたけれども、高校生ってこんなこと考えてるんだと勉強させていただきました。

澁谷：土曜日のところは、ことさら「土曜日の何かをやるように」というのは適切じゃないわけなんですけれども、私学は建学の精神に基づいて独自のカリキュラムを組んでいるので、公立との違いということで「土曜日やってますよ」というのをウリにされてるので、石野さんがおっしゃるように、土曜日を返した方が、生徒に時間を返した方がいいというようなところは最もだとは思いますが、私学の人たちに、「土曜日は是非やめるべき」というのはなかなか言いづらい項目。

八重澤：希望者だけで、来たくない生徒は来なくていいのです。私も事前に、一体どんな講義がされたかホームページを見たら、やっぱり学校のPR(?)ですよ。基本的には「うちの学校はこういうことをやっている」ということと、どういう教員(講師)が来た等を、ホームページに出して(掲載して)いました。県立(高校)ではなかなか難しいですよ。これが一つの私学の特徴だと思います。

司会：それでは他にご意見等ございませんでしょうか。本日は貴重なご意見ありがとうございます。

ございました。意見交換についてはこれで終了いたします。有識者の皆様には、意見交換出席のお願いをした際に、意見交換会を1回もしくは2回ということでご案内しておりましたが、皆様のご協力のもと、本日の意見交換会は、順調に進みました。ありがとうございます。今後、本日いただいたご意見を踏まえて、我々の方で配分項目をもう一度整理検討し直しまして、また来年度の予算編成に向けた作業を進めてまいりたいと思います。なお本日の議事内容につきましては、県のホームページで公表する予定ですので、また議事録を作成次第、皆様へお送りして、確認いただきたいと思っておりますので、よろしくお願ひいたします。

それでは、以上をもちまして、意見交換会を終了いたします。本日はお忙しい中、どうもありがとうございました。

以上